

	%	
低、中、高と一貫した指導法がわかり大変参考になった	57.3	23人
ブロックごとの深まりはあったがさほど参考にならなかった	35	14人
特に改善のあとがみられなかった		1人
その他		(無回答2)

＜考察＞ 低、中、高学年と一貫した指導法がわかり大変参考になったとする先生が、57.3%。ブロック内での深まりはあったが、全体としてはさほど参考にならなかったというのが35%となっている。これはブロック内では自由に発言でき、研究も深まったが、全体の中では時間もなく、話し合いがその授業だけに終始してしまっ、直接自分の学年、学級の問題を解決するまでにはいたらなかったとしている。

— 第二次調査の結果とまとめ —

この研究でわかったことは要約してみると

- ① 校内研修の改善のために、授業研究を集約し、学年、ブロック、全校とそれぞれに、研究テーマの解決のために、授業の記録のとり方をくふうし同教材で深みのある研究ができたこと。
- ② 現職研修として、比較的容易に解決できたのは、ブロック研究会、共同研究会など研究会を多く持つようにした形式的なことである。
- ③ 校内研修で、今年度は研究発表会という一つの目標があったため、時間的なゆとりがなくとも、各自の自主性によっておぎなわれたが、研究内容や運営についてはまだまだ改善されなければならない問題が残されている。
- ④ 校内研修の効果を高めるには、研修時間のとりかたとともに、議題の焦点化、話し合いの方法等についての習熟の必要さと、短時間内で話し合いができるようにすること。
- ⑤ 小集団活動では自主的に研修に参加するが、それを共同研究に生かすようにすることのむずかしさ。

5. 研究のまとめと今後の問題

この研究は、ブロック研究の長所を、共同研究の中に生かし、現職研修を成功させようとしたのである。

- (1) 校内研修におけるブロック研究については、ほとんどの先生方がその利点を認めている。それをいかに具体的に共同研修のなかに位置づけたらよいか、即ち、個人、学級の問題 ↔ 学年の問題 ↔ ブロックの問題 ↔ 学校全体の問題、となるように日常的な諸活動の中で意識して、実践する方策を明らかにしなければならない。
- (2) 研究の成果を判断する基準は、どうしても直接的なものに限られがちであった。しかし、個々の具体的な実践についてみると、その基盤になるのは、理論である。実践が先か理論が先かという二者択一的な考えではなく、両者が併行して研究されていくような研修が必要であろう。そのためにも研究そのものについての考え方を再認識する方法をもっと重視していかなければならない。
- (3) 体育科の研究を現職研修の中に位置づけ、何らかの形でつづけていきたいとする先生方が85%もみられた。このことから校内研修のすすめ方をさらに改善し、見通しに立った計画を具体的に立案するとともに、ひとりひとりの果たす役割分担を明確にしこの意欲を大切に、長続きする研修活動にするとともに、研修の深まりを図っていくようにしなければならない。

6. 参考文献

- 学校経営に関する研究 県教育センター
- 専門性を高める研究のすすめ方 県教育庁義務教育課編
- 学校経営 明治図書